

グローバルCOE
心の社会性に関する教育研究拠点

The Center for the Sociality of Mind

Newsletter

6

December 1, 2009

北海道大学大学院文学研究科・教育学研究院・経済学研究科
カリフォルニア大学サンタバーバラ校進化心理学センター

CONTENTS

- 2 第3回国際シンポジウム
- 3 "Socio-Ecological Approaches to Cultural and Social Psychological Processes"
- 3 GCOEスピーカー シリーズ
- 4 国際ワークショップ

●新リーダー挨拶



プログラム開始から 2年間を振り返って

北海道大学大学院
文学研究科教授

亀田 達也

2007年6月に発足した私たちのグローバルCOEプログラム「心の社会性に関する教育研究拠点」もいよいよ折り返し地点を迎えました。お陰様で、2009年6月に行われた中間評価ヒアリングでは、極めて高い評価・コメントを頂きました。後半の開始にあたり、当初の予定どおり山岸俊男教授からバトンタッチを受け、当プログラムのリーダーを務めることになりました。責任の重さに身の引き締まる思いがいたします。

これから約2年余の事業としては、引き続き、世界の第一線に通用する若手研究者の育成に力を注ぎたいと考えています。幸いにも、グローバルCOEプログラムの開始以来、当拠点の若手研究者は極めて順調に活躍の場を拡げており、国際学術誌への論文刊行数、論文被引用数に代表される国際的インパクトなどのいずれの指標を見ても、21世紀COEプログラムの終了時点と比べ、実に4倍以上の伸びを示しています。加えて、過去2年間に、5つの国際学会賞、7つの国内学会賞が若手に与えられています。こうした若手研究者の育成を、カリフォルニア大学サンタバーバラ校「進化心理学センター」をはじめとする海外の主要拠点との連携、科研費特定領域研究「実験社会科学」における国内社会科学主要拠点との連携を通じ、ますます促進していきたいと切に願っています。

さらに当プログラムの新しい方向性として、神経科学の拠点である玉川大学グローバルCOE「社会に生きる心の創成—知情意の科学の再構築—」との間でさまざまなコラボレーションが始まりました。その一環として、このほど、日本学術振興会の「異分野融合による方法的革新を目指した人文・社会科学研究推進事業」に、『意思決定科学・法哲学・脳科学の連携による“正義”の行動的・神経的基盤の解明』が採択されました。行動科学と神経科学の接合可能性を探ることは、私たちのCOEプログラムの1つの重要な展開方向になりつつあります。

残る2年半も引き続き、事業推進担当者を中心として、研究と教育の両面にバランスのとれた活動を進めたいと願っています。皆様からのさらなるご支援とご協力を、心よりお願い申し上げます。

第3回 国際シンポジウム

※本ワークショップは、北海道大学社会科学実験研究センターとの共催で行われました。

“Socio-Ecological Approaches to Cultural and Social Psychological Processes”

●日時: 2009年7月31日(午前9時～午後5時20分)

8月 1日(午前9時半～午後4時)

●場所: 北海道大学人文・社会科学総合教育研究棟W409



発表者



Glenn Adams
(University of Kansas)



Chi-Yue Chiu
(Nanyang Technological University, Singapore;
University of Illinois at Urbana-Champaign)



Ying-Yi Hong
(Nanyang Technological University, Singapore;
University of Illinois at Urbana-Champaign)



Letty Kwan
(University of Illinois,
Urbana-Champaign)



Shigehiro Oishi
(University of Virginia)



山岸俊男



結城雅樹



石井敬子





Recently there has been a resurgence in the ecological approach to culture, with a particular emphasis put on socio-ecological factors (e.g. Adams, Anderson, & Adonu, 2004; Cohen & Nisbett, 1994; Oishi, Lun, & Sherman, 2007; Yamagishi & Yamagishi, 1994; Yuki, et al., 2007). This approach is genuinely "social-psychological," in the sense that analyses focus on identifying how characteristics of macro-level social institutions and social realities logically connect to the psychological processes of people who reside in these realities. Thus, a socio-ecological approach has high potential for bridging knowledge and theories in cultural and social psychology. This symposium brings together researchers who conduct cutting-edge research implementing this perspective, and aims to discuss future directions.

GCOEスピーカーシリーズ

第3回

グローバルCOE「心の社会性に関する教育研究拠点」(CSM)では、年に数回、心の社会性にかかわる諸領域において第一線の海外の研究者をゲストスピーカーとして招聘し、講演していただいている。

- 日時: 2009年10月2日(金)午後1時~2時半
- 場所: 北海道大学人文社会科学総合教育研究棟 W201

"Heuristics for mate choice"

Traditional views of rational decision making assume that individuals use a few powerful mechanisms to solve most of the problems they face. But given that human and animal minds have evolved to be quick and just "good enough" in environments where information is often costly and difficult to obtain, we should instead expect individuals to make use of an "adaptive toolbox" of simple, fast and frugal heuristics that make good decisions with limited information processing. These heuristics typically ignore most of the available information and rely on only a few important cues. Yet they make choices that are accurate in their appropriate application domains, achieving ecological rationality through their fit to particular information structures. We have been studying such heuristics in important adaptive domains such as mate choice, where people may use key pieces of information to guide their choices, including social information gathered from other individuals (in a phenomenon known as mate copying). Furthermore, people may use simple aspiration-level or satisficing heuristics to determine when to stop searching for mates. In this talk I will describe our general research framework and our specific investigation of particular heuristics for mate choice, and how we use novel sources of data such as speed-dating to test for the use of these heuristics.



Peter M. Todd

(Cognitive Science Program,
Indiana University)

国際ワークショップ

第18回 国際ワークショップ

※本ワークショップは、北海道大学社会科学実験研究センターとの共催で行われました。



スピーカー
Cecilia Cheng
(The University of Hong Kong)

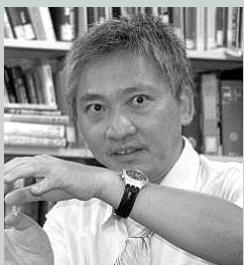
Who moved my cheese?: Coping flexibility and adaptation to life changes

日時 2009年4月27日 (月曜日)
12:30～14:00
場所 北海道大学大学院
文学研究科E204

ストレスフルな出来事がどの程度コントロール可能なものかどうかにより、それに対する対処法は異なると言われてきている。具体的には、コントロールできるものに対しては、その問題そのものに焦点をあてた対処法が、一方コントロールできないものに対しては感情に焦点をあてた対処法が一般的に有用である。このトークでは、こうした対処法における柔軟性に、個々人の認知的なプロセスの特性と認知的完結欲求に代表される動機づけの側面が関与していることを示すこれまでの研究が紹介された。

第19回 国際ワークショップ

※本ワークショップは、北海道大学社会科学実験研究センターとの共催で行われました。



スピーカー
Chyi-in Wu
(Institute of Sociology,
Academia Sinica, Taiwan)

Luminous Shine versus Dark Shadow: The Duality of Late Adolescent's Friendship Network

日時 2009年9月7日 (月曜日)
10:30～12:00
場所 北海道大学大学院
文学研究科E204

このトークでは、青少年期における友人関係の時系列的变化と、その関係内におけるライバルの存在を調べるために、台湾の2つの都市における高校生を対象に行われた大規模な研究が紹介された。 "Frenemy"と形容されるような、一方からは友人と思われているが、その相手からはライバルだと思われている友人関係がある程度の割合で存在し、また性差が見られることがわかった。具体的には、男子学生のほうが女子学生よりもライバルの名前を挙げやすく、また "Frenemy"と形容される関係も相対的によく見られた。

予告

東京・上野にGCOEがやって来る！

大学サイエンスフェスタ

本グローバルCOE拠点は、国立科学博物館で研究紹介を致します。ぜひご来場ください。

■期 間:12月11日(金)～12月20日(日)

■開館時間:9:00～17:00

金曜日は20:00まで(入館は各閉館時間の30分前まで)

■休 館 日:毎週月曜日

(ただし11/23(月・祝)は開館、翌11/24(火)は閉館)

■会 場:国立科学博物館 地球館地下1階 特別展示室など

入館料:通常入館料のみでご覧いただけます。

一般・大学:600円(団体300円)、高校生以下無料

※団体は20名以上

主 催:国立科学博物館および参加大学

お問合せ:ハローダイヤル 03-5777-8600

グローバルCOE

心の社会性に関する教育研究拠点

The Center for the Sociality of Mind



〒060-0810

札幌市北区北10条西7丁目

北海道大学大学院文学研究科行動システム科学講座

TEL 011-706-3057

E-mail gcoe-csm@lynx.let.hokudai.ac.jp

Homepage <http://lynx.let.hokudai.ac.jp/CSM/>